

改革派信仰の継承と地上の生の評価

山梨栄光教会 関口 康

はじめに

1、「地上の生の評価」とは何か

「地上の生の評価」(De waardering van het aardse leven)は、20世紀中葉のオランダで活躍した改革派神学者アルノルト・アルベルト・ファン・ルーラーが、1960年に発表した論文のタイトル。「評価」(waardering)は、appreciation(好評、称賛など)を意味する。このタイトルにおいてすでに、著者が「地上の生」について「高い評価」を与えていることは明らかである。

「地上の生」(het aardse leven)の意味は多岐にわたるものであり、特定は困難である。その意味を探り当てることが、この論文の目的でもある。とりあえず、それは、私たちが今ここで、現実的かつ日常的に体験している生のことである、とお考えいただきたい願うものである。

2、なぜそれが「改革派信仰の継承」か

改革派信仰は、あらゆる異教主義ならびにあらゆるキリスト教信仰に伏在する、地上の生に対する「低い評価」に反対するための根拠と力を持っている。「古代のグノーシス主義のパン種が、絶えず繰り返し、キリスト教的な意識や思想の中に働き続けている」とファン・ルーラーは語る。「低い評価」は結局、キリスト教伝統の「異端化」を意味する。われわれにとって、この問題を深く認識することが重要である。

A ファン・ルーラーについて

ファン・ルーラーは、1908年12月10日、オランダ・アーペルドールン生まれ。両親は、国教会系オランダ改革教会（NHK）の信徒で、フェリユーウェ地方に継承されている体験主義の伝統(bevindelijke orthodoxie)に立っていた。父ディルクはパン配達人。息子が頭脳明晰であることを知り、両親は小学校以上進学させるのをやめようと考えていた。

職業学校に入学するが、牧師になりたいという夢を実現するため、ギムナジウム（当時の学生85人）に転校。ギムナジウム時代に、カイパー、パーフィンク、バルト、トゥルナイゼンの神学書やカントの純粋理性批判などを読破。サッカーにも熱中した。

1927年フローニンゲン大学神学部に入學。当時のフローニンゲンには、アーノルトが子どもの頃から通っていたアーペルドールン教会（NHK）の牧師であったTh・ハイチェマが、教鞭をとっていた。アーノルトは、ハイチェマの影響でバルトに傾倒。しかしそのうち、バルトの神学が「信頼できる実体をわずかしか持っていない（氷のように）冷たいもの」であると知り、バルト批判に転じる。大学での卒業論文は、W・アールダース教授の指導の下、「ヘーゲル、キルケゴール、トレルチの歴史哲学」であった。ディベートグループの座長や『神学の声』(Vox Theologica)の編集など諸活動に積極的に参加した。

1933年11月17日ヨアンナ・アドリアーナ・ハーメリンクと結婚。11月26日、クバート改革教会に就職。就任説教が雑誌に掲載される。クバートの牧師時代、オランダ国内で教会再編成の動きが活発化。信条主義に立つ「教会再建派」(Kerkherstel)と自由主義に立つ「教会建設派」(Kerkopbouw)が共同で再編成案を提出するが否決。ファン・ルーラーは「教会再編派」に所属。またクバート時代に、『カイパーのキリスト教文化の理念』(雑誌発表は1937～1938年。単行本出版は1940年)を発表し、カイパー批判者として広く知られるようになる。

1940年2月4日、ヒルファースム教会に転任。赴任後3ヶ月して第二次大戦が勃発し、教会のさまざまな仕事が閉鎖に追い込まれる。1946年『宗教と政治』において、国家社会主義とドイツ・キリスト者の蛮行を厳しく批判、「セオクラシー」の理念を積極的に打ち出す。また戦後のオランダ再建を願いつつ、「オランダ復興ラジオ」(Radio Herrijzend Nederland)の礼拝番組の運営に携わる。「プロテスタント同盟」(Protestantse Unie)という政党の幹部にもなり、1946年総選挙用の党綱領や緊急政策を起草。しかし、総選挙において下院議席を獲得できず、惨敗。

ヒルファースム時代、オランダ改革教会（NHK）の「教会規定の原理に関する委員会」に所属、教会規定の全面的改定作業に着手。古い学派間対立を乗り越える「宣教」の

理念を強調。1951年5月1日に正式に採用された新しい教会規定において、ファン・ルーラーの影響は明白である。そのような激務の中にもかかわらず、1947年には神学博士号請求論文、『律法の成就』を書き上げ、「最優秀賞」(cum laude)を取得する。

1947年1月3日、ユトレヒト大学教授に就任。当初、聖書神学、オランダ教会史、内国・外国宣教学を担当。1952年以降、教義学、キリスト教倫理学、オランダ改革教会史、信条と典礼文書、教会規則を担当。教授就任後も、ファン・ルーラーは人気の高い説教者として、あらゆる方面で活躍。とりわけ、彼が亡くなる日まで、二週に一度、AVROラジオにおける朝の礼拝番組で、説教を担当。放送後、それらの原稿は、冊子としてまとめられ、多大な読者を得る。国際的關係において名を知られるようになるのが遅かったのは、国外向けの書物をあまり書かなかつたため（書く時間が無かつた？）。1953年8月に行われた世界長老教会協議会(World Presbyterian Alliance)での「歴史的局面における御言への奉仕」(Der Dienst am Wort in geschichtlichen Aspekt)という発題には多くの人々が満足し、とくにフランスのカルヴァン主義者たちから肯定的な評価を得た。1956～1958年、西ドイツの各地で多くの講演を行う（この講演会に、当時ヴッパータール神学校で講師をしていたR・ボーレンとJ・モルトマンが出席、甚大な影響を受ける）。1960年代ヨーロッパ各地の大学でマルクス主義に基づく「学生革命運動」(Studentenrevolutionen)が同時多発。ファン・ルーラーは、学生たちの動きや、「救いの社会化」(vermaatschappelijking van het heil)という思想傾向に反対の立場をとり、「保守主義者」「資本主義の信奉者」との批判を恥とせずと戦う。またボンヘッファー、モルトマン、ゼレらに対する批判者ともなる。「地上の生の評価」は、この時期に書かれた、最も重要な論文である。

ハードワーカーであったファン・ルーラーは、「長年、いろんなるくでなしたちから、いじめぬかれた」(A・ド・フロート)。1970年12月15日、三度目の心筋梗塞が起こり、死去(62才)。12月18日に行われた葬儀には、家族に加えて、非常に大勢の友人たち、同僚たち、学生たち、昔の学生たちが全国各地から参列した。

ファン・ルーラーは、妻J・A・ファン・ルーラー-ハーメリンクとの間に5人の子どもをもうけた。妻は夫の死後、教会法の学びを続け、1963年法学博士号を取得。ユトレヒト改革派コミュニティ教会(Utrechtse hervormde wijkgemeenten)長老、1974年～1979年には大会議員、拡大議長団(breed moderamen)のメンバーであった。ファン・ルーラーの『神学著作集』(全6巻)の出版の際、第2巻から第6巻までを妻が準備した(第1巻はファン・ルーラー自身による)。また夫の遺作のいくつかを出版した。彼女は1995年11

月28日に死去。夫の墓の隣に置かれた墓石には、「死は征服されている」(De dood is overwonnen)と刻まれている。

(以上、A・ド・フロート「ファン・ルーラー教授略伝」を基に構成した)

B 「地上の生の評価」(1960年)

1、背景

ファン・ルーラーの著作全体に言いうることは、彼の論文には脚注や引用文献への指示がほとんどなく、論争相手の名前さえ紹介されない場合が多い。しかし、彼の論旨は明快なので、繰り返し読みこんでいくうちに、彼の意図を理解することができるようになるであろう。「地上の生の評価」において、ファン・ルーラーが論争相手とみなしているであろうと推定しうる相手は、以下のとおりである。

- (1) バルト主義：キリスト一元主義における「地上の生」の低い評価
- (2) マルクス主義：階級闘争理論における「地上の生」の高い評価の不徹底性
- (3) モルトマン：その(再洗礼派的)「新創造論」における「地上の生」の低い評価

2、梗概

(1) 地上の生の構成要素

物質性

身体性

単独性

性(セクシュアリティ)

時間性

共同体性

歴史的で系図的なもの

(2) 評価の諸可能性

地上の生は「非存在」である

地上の生は「仮象」である

地上の生は「被い」である

地上の生は「真実で永遠なる存在のイメージ・影・反映」である

地上の生は「刑罰」である

地上の生は「浄化」である

地上の生は「訓練」である

地上の生は「本質的で唯一のもの」である

(3) キリスト教信仰からのテーマ

地上の生は「不必要であるが、とてもよいもの」である（三位一体論との関連）

地上の生は「神的でも悪魔的でもないもの」である（創造論との関連）

地上の生は「十分に現実的な存在」である（予定論との関連）

地上の生は「歴史的なもの」である（歴史哲学との関連）

地上の生は「キリストによって摂取されたもの」である（受肉論との関連）

地上の生は「終末においても私との関係を失わないもの」である（終末論との関連）

(4) 悪の問題

罪とは「地上の生への積極的評価を否定すること」である

罪とは「地上の生において自己の被造性に満足しないこと」である

愛とは「罪のあがない」であり、「悪のあがない」である

(5) キリスト教的将来待望

一連の重大な誤解の餌食になってはならない

神の働きは未だ途上にあるゆえに、われわれは世界の現実から逃避してはならない

地上の将来（小さな将来としての明日）に備えができていない者は決して永遠の将来を体験できないであろう

(6) 重荷・仕事・楽しみとしての生

地上の生は「重荷」である

地上の生は「仕事」である

地上の生は「楽しみ」である

3、評価

G・イミンクは、「地上の生の評価」におけるファン・ルーラーの立場を以下の4点に要約する。

- (1)(キリスト教的)創造論は「世界は神的なものではない」という思想を含蓄する。
- (2)(キリスト教的)創造論は「被造的現実(*geschapen werkelijkheid*)そのものは、悪と一致しないし、罪と混同できないものである」という思想を含蓄する。
- (3)キリスト教は、「われわれは地上の生を十分に現実的なものとみなす」と語りうる。
- (4)「歴史」の要素が、ファン・ルーラーの思想における一つの重要な要素である。

C まとめ

今日、「喜びの神学」の必要性が語られている。ファン・ルーラーにとって世界は、神の子どもたちとしての人間が、神の御前で、喜びつつ遊び、(良い意味で)自信をもって、楽しく生きていく場所であった。そんなに気楽な思いになれない、とお感じだろうか。

しかし、ウェストミンスター小教理問答第1問は、次のように語る。「人の主な目的は、神の栄光を現わし、永遠に神を喜ぶことである」。この告白において重要な問いは、神を喜ぶのは<誰>か。また<いつ>、<どこで>という問いも無視できない。<わたし>が、<今>、<ここで>、神を喜ぶのではないだろうか。また神を喜ぶこと(*frui Dei*)は、神の創造としてのこの世界を喜ぶこと(*frui mundo*)でもあるのではないだろうか。

(2001年7月16日、東部中会教師会、東京教会)